

# 春の雪

2005(平成17)年9月6日鑑賞(東宝試写室)

☆☆☆



監督＝行定勲／原作＝三島由紀夫／撮影監督＝季屏賓／出演＝妻夫木聡／竹内結子／高岡蒼佑／及川光博／宮崎美子／岸田今日子／榎木孝明／大楠道代／若尾文子／田口トモロヲ（東宝配給／2005年日本映画／150分）

……大正初期の豪華絢爛たる貴族社会の中でくり広げられる「元祖国産純愛モノ」(?)だが、さてその出来は……？ 1970年に割腹自殺した三島由紀夫の原作が遂に映画化されると知り、大いに期待したが……？ 人間の輪廻・転生をテーマとした『豊饒の海』の第1部『春の雪』で三島由紀夫が描く「至高の愛」が、貴族のお坊ちゃんのわがままのように思えたのは、ひょっとして私が年をとったせい……？ 「春の雪」とは、はかないものの象徴。日韓友好に水をさすつもりはないが、時を同じくして公開されるヨン様の「四月の雪」に負けないようにしなければ……？

## 三島由紀夫、1970年

三島由紀夫が市ヶ谷の陸上自衛隊駐屯地で割腹自殺したというニュースを私が聞いたのは、大学入学以来没頭していた学生運動から手を引き、司法試験の勉強に集中していた大学4回生の後期の1970(昭和45)年11月25日のこと。そして後で知ったことだが、この三島由紀夫が1965(昭和40)年から渾身の力を込めて書き、新聞連載されていた『豊饒の海』4部作の最終完結原稿が新潮社に渡されたのが、この割腹自殺と同じ日だったとのこと。

1970年と言えば大阪万博が開催され、日本中が好景気で沸き立っていた時代。しかし同時にそれは、日本人が日本人の心を失いはじめた時代……？ そんな1970年という年を、この映画を機会に35年後の今あらためてじっくりと考えてみたいものだ。

## これぞ、元祖国産純愛モノ！

三島由紀夫の『豊饒の海』第1部となる『春の雪』は、大正初期を時代背景とし、侯爵家の若き嫡子松枝清頭（妻夫木聡）と伯爵家の美しき令嬢綾倉聡子（竹内結子）との純愛を描いたもので、「これぞ、元祖国産純愛モノ」というべきもの。

純愛モノにはハッピーエンドになるものと、悲劇的結末に至るものの2種類があるが、三島由紀夫が描く世界にハッピーエンドがあるはずがない。彼が描く純愛モノは、「滅びの美学」の極みとなるはずのもの。しかし、その結末は……？

## 三島由紀夫作品にはもっと深い意味が……？

『豊饒の海』第1部『春の雪』は清頭と聡子との許されることのない「純愛」がテーマだが、『豊饒の海』4部作全体のテーマは純愛だけではなく、仏教思想における輪廻りんねと転生てんしやうそして人間の夢、というきわめて不可解なもの……？

本作でも重要な役割を果たすのが清頭の無二の親友である本多繁邦（高岡蒼佑）だが、実は本多は『豊饒の海』全4部を通じて登場し、主人公に準ずる役割を果たすことに……。すなわち、第2部『奔馬』での剣道界の神童飯沼勲、第3部『暁の寺』でのタイの王女ジン・ジャン、第4部『天人五衰』での少年安永透は、それぞれ清頭が転生してきた姿……。そして、それを見届け、確認するのが本多の役割なのだから……。

## 難しい清頭のキャラ……？

『豊饒の海』第1部『春の雪』のストーリーの骨格をなすのは少年清頭のキャラ。何不自由ない侯爵家の嫡子として生まれ、しっかりとした将来が約束されているものの、19歳となった彼は単純にそれを受け入れることができず、心に大きな屈折感を持っていた。そんな清頭が書いているのが夢日記。よく夢を見る彼が、夢の中で見た世界を書き綴ったものだが、これを見るだけでもその早熟ぶり、博識ぶり、そして老成ぶりが理解できるというもの。そして、これぞまさに三島文学が描く主人公の世界……。こんな清頭だから、幼なじみで2つ年上の美貌の女性聡子に対して恋心を持っていても、それを率直に表現することなど思いもよ

らないことだった……。それが本作の「純愛」の出発点……？

## 他方聡子は……？

清頭に比べて、あの時代においては女性の選択肢は少ないこともあり、聡子の思いは比較的単純。つまり、清頭への恋心を内に秘めながら、清頭からの求婚を待っている毎日というわけだ。

聡子の両親のもとに次々と縁談話が届くのは当然だが、聡子はそれをいつも拒否。それに業を煮やした両親は遂に宮家との縁談を進めることに……。

## 侯爵家の生活ぶりは……？

清頭の父親の松枝侯爵（榎木孝明）は派手好きだから、再三パーティーを主催。そんな席で清頭に紹介されたのが、日本に留学しているシャム（現在のタイ）の2人の王子。そのうちの1人は年頃の青年らしく、自分の恋人の写真を清頭に見せた後、「清頭の恋人は……？」と質問。これに対して松枝侯爵は「まだこの子は19歳で恋人はいません」と答えたが、果たしてそれは……？

さらに松枝侯爵は、聡子と宮家との縁談が進んでいくことについて、清頭に対して「お前には異存はないな？」と確認。これに対して清頭は「なぜそんなことを聞くんです。僕に異存などありません」と答えるが、これホントは何ともトンチンカンな親子の対話では……？ ここで興味深いのは、松枝侯爵の母親つまり清頭の祖母に扮する岸田今日子の語り。松枝侯爵がなぜ侯爵になれたのか？ それに伴う犠牲は？ などのウラ話（？）がタツプリ、じっくりと理解できるはず。そしてまた、映画の後半清頭が1人奈良へ向かうときの旅費の工面も……？

## 清頭がめぐらす恋の権謀術策は？

清頭の親友は本多繁邦1人だけ。したがって清頭はほとんどの時間を1人で過ごしているから頭の中で考えることがいっぱい。そんな清頭がめぐらせた恋の権謀術策は、本多をアテ馬に使ったり、聡子宛にひどい手紙を出すポーズをとったりという結構いやらしい（？）もの。しかし、いくら計算し尽くしたつもりでも所詮それは19歳の男が考えることだから、まだまだ甘い……？

そのうわ手をいったのは、聡子の侍女の蓼科（大楠道代）。この映画の中盤で展開されるこの「人工的」な恋模様（？）は面白いが、難点はスピード。大正時代だから仕方ないとは思うものの、そのスローさに私は少しイライラ……？

## すごい存在感の若尾文子

この映画のはじめと終わりにお寺の門跡の役で登場する若尾文子は18年ぶりの映画出演とのことだが、非常に重要な役割を果たすことになるので要注目！

岸田今日子と同じく、彼女が語るセリフの1つ1つが大きな説得力を持っており、やっぱり若いモンだけではダメだなと痛感させてくれるもの……？

こんなシーンを見ていて私が思い出したのが、キム・ギドク監督が『春夏秋冬そして春』（03年）と『サマリア』（04年）で見せてくれた仏教の世界。どこまでが共通するもので、どこまでが関係ないものか私にはよくわからないが、人間の夢や人間の輪廻・転生には仏さまの力が関与していることはたしか……？

## やせ我慢もいい加減に！

清頭と聡子の2人は幼なじみの枠を越えて、あるとき一瞬いい雰囲気……。ところがそれを率直に表現できないのが清頭のひねくれた性分……。そのため聡子と宮家との縁談にも異議を唱えず、「われ関せず」の姿勢を貫くことに……。そのうえ、この時期、切羽つまった聡子から何通も手紙が送られてくるにもかかわらず、清頭はやせ我慢……。すなわちこれを開封すらせず、焼いたり破ったり……。こりゃちょっと子供じみてやしませんか、と私は思ったのだが、それはひょっとして私が年をとりすぎたせい……。？

## わがままもいい加減に……。！

ところがやっぱり清頭も年頃の男の子。聡子に会いたい気持を我慢できなくなった清頭は遂に侍女の蓼科と連絡をとり、1度だけでいいからと聡子との「密会」の段取りをとらせることに。その脅迫のネタは、燃やしてしまった聡子からの手紙。「それをバラす」と脅かされれば蓼科としては仕方がない。「1度だけですよ」と念押ししたうえでの2人の密会だが、さてその場所は？ その雰囲気

は？ また2人の逢瀬の美しさは……？ さてこれで義務を果たし終え、明日からは姫さまと清顕との縁がきっぱり切れたと思った蓼科だったが、そこで清顕が述べた言葉は驚くべきものでわがまま丸出し……？ わがままもいい加減にしてよ、と思わず私は言いたくなってしまうが……？

「はかない恋」「至高の恋」だった清顕と聡子だが、聡子の宮家との婚姻に天皇の勅許が下りた後は、それは「禁断の恋」「不可能な恋」になってしまうのは当然。しかし同時に、そうなればなるほど燃えあがるのが若い2人の恋。さてその後のストーリーは、予想される悲劇的結末に向かって、どのように展開していくのか？ それは2時間30分というこの長編映画をたっぷり観てのお楽しみに……。

## 行定監督の2つの特徴が……？

行定監督は『GO』（01年）で数々の映画賞を総ナメにしたが、それ以上に彼を有名にしたのは、究極の日本版純愛映画として大ヒットした『世界の中心で、愛をさけぶ』（04年）の大成功によるもの。他方、戦後60年を記念して吉永小百合を主演に迎えて完成させた『北の零年』（05年）はそれなりにヒットしたものの、あまりにも単純すぎて（？）、私は少し失望した作品。

そして、この『春の雪』は大正初期の豪華絢爛たる貴族社会の中での「悲恋」を描くものだから、「セカチュー」流の感動作となっていることを大いに期待したのだが、どうもその出来は、『北の零年』流のよう……？ もっとも、これはあくまで私の独断と偏見による評価だが……？

この『春の雪』より一足早く9月17日に公開される韓国映画が、ヨン様ことペ・ヨンジュン主演の『四月の雪』。去る8月29日に日本の空港に降り立ったヨン様は、8月31日に「さいたまスーパーアリーナ」で開催される公開イベントをメインとしてあちこちで観客の山を。さらに9月1日に都内で開かれた記者会見に集まったマスコミの記者は1000名と異常な数……？

『春の雪』も『四月の雪』もまったく同じ趣旨のタイトルで、同時期の日韓激突（？）となるわけだが、日韓友好に水をさすことにならないよう十分配慮しながら、大いに張り合ってもらいたいものだ……。

2005(平成17)年9月7日記